



平成25年度糸魚川ジオパークカルテッジ卒業論文

著者名・題名(あいうえお順)

五十嵐 正 論文・『糸魚川真柏に関する特徴の研究』

池田 直子 論文・『糸魚川地域に於ける姫と石の史実検証に関する研究』

伊藤 富士雄 論文・『糸魚川地域における農林水産資源と人文や自然環境資源
がもたらす高齢社会に良い地域に関する研究』

内山 伸一 論文・『糸魚川地域に於ける地すべり地帯と古来からの地名に関する
関連性に就いての研究』

恩田 恵美子 論文・『糸魚川ジオパークの水資源に於ける多様性と可能性に関
する基礎研究』

齋藤 一美 論文・『世界ジオパーク糸魚川・24 のジオサイト×24 の楽しみ方
×24 のストーリーの考査研究』

竹内 慎治 論文・『ジオトープ』

堀田 須美江 論文・『誰でも行ける癒しのジオサイトに関する考察と研究』

山本 愛一 論文・『マイコミ平の千里洞における植生の観察と今後の展望に関
する研究』

山本 かずみ 論文・『里山を活用した糸魚川ジオパークにおける生きがいネッ
トワークに就いての事例研究』

五十嵐 正・『糸魚川真柏に関する特徴の研究』・要旨

糸魚川真柏は明治40年(1907)頃、四国出身の鈴木多平により現新潟県糸魚川市の黒姫山付近で発見されたが、なんとヒスイが世に認知された昭和13年(1938)より31年も前の事である。糸魚川真柏の特性は国内のどの産地より優れていると盆栽界で絶賛され、糸魚川真柏にある「得難さ」を全国各地の展示会で称賛されている。石灰岩の断崖絶壁で様々な厳しい気象条件の中から作り出され、捻転した幹や白骨化したジンとシャリ芸が堅牢で、葉性の繊細さと葉の美しさが愛好家のみならず、一般の方々にも感動を与えてきた。しかし自生地で枯渇したと言われる中で、愛好家によって育まれていた糸魚川真柏の名品と言われた物が市外へ流出している。残された糸魚川真柏を、世界糸魚川ジオパークに認定された大切なこの地の資産として、糸魚川真柏の当地として育成保存をしたい。小中学生の頃の卒業式などの式典で演台を飾っていたあの盆栽のように、糸魚川真柏の雄姿をこの地の資産であることを子供達に「知って、育てて、受け継ぐ」を、教育の場に反映させたい。幸い糸魚川真柏は、市内の愛好家は元より全国の愛好家によって、親木から切り分けされた挿し穂を長い年月をかけ、岩壁で育まれていたその雄姿が「風を感じる樹」として植木鉢の中で再現されている。

池田直子・『糸魚川地域に於ける姫と石の史実検証に関する研究』・要旨

新潟県の糸魚川地域に於ける姫と云えば、奴奈川姫(ヌナガワヒメ)である・・・姫は、古代高志(越)の国(現代の頸城地域)にあり、美しく、賢く、勾玉を持ち、この地を治めていたという(口碑伝説)奴奈川姫伝説の姫である。「奴奈川」の文字は人や時期・統治により文字がかわり、現在の漢字になった。この史実について伝説で終わらない為にも、そして糸魚川に、奴奈川姫在り!の検証・研究を進める。その一環として縄文時代・大和出身の興味深い巫女姫との比較をし、「奴奈川姫」が『ド・ナ・カ・ワ・ヒ・メ』と呼ばれないために、知名度を上げてゆきたい。『ぬ・な・か・わ・ひ・め』の言葉の響からは、緑と赤の石を持ち、地を司ると言う意味がある事から、翡翠と瑪瑙(めのう)の輝ける玉を用いたシャーマン(巫女姫)としての存在という事が納得できる。本研究に於ける持論(仮説)として、奴奈川姫の居た時代では、奴奈川族が生活し、その先祖を辿ると縄文時代になる。姫は弥生・古墳時代と長期に渡る存在である事から・・・歴代天皇のように、第一代・奴奈川姫:黒姫→第二代・奴奈川姫:長者ヶ原姫になり受け継がれ、巫女力・霊力・血筋・等を先代の姫と族の長が決めたと仮定する。また、本研究において対比する『瀬織津姫』(せ・お・り・つ・ひ・め)は、別名・「卑弥呼」と仮定する。初代 奴奈川姫は、瀬織津姫の噂を聞いた可能性があると考え、紐解いてゆけば、出雲・伊勢・諏訪・高志の日本列島・名付けて超絶パワースポット(スクエアライン)は結ばれ糸魚川の重要性が見直され、糸魚川ブランド巫女姫・奴奈川姫の存在を史実・永遠の石、岩石・ジオパークサイト

等と関連付け、五感体験しながら検証し発信することを本研究の目的とする。

伊藤 富士雄・『糸魚川地域における農林水産資源と人文や自然環境資源がもたらす高齢社会に良い地域に関する研究』・要旨

要介護者と介護・医療の従事者とのよりよい人生最後の楽園を求めて自然の中で活動して活性出来るライフワークを一つの理想と考える。俗に言われる「ピンピンコロリと生きて逝く」とした事も、人生の幸せの選択肢である。この考え方については、様々な捉え方があるが、人が「本来の人らしい生き方」の一つとして位置づけられている。これらの生活を送るためには、受け入れ態勢の充実が図られる必要があるが、この部分について新潟県の糸魚川地域においては、地形・地質・生態系・文化財産をテーマとした世界ジオパークの認定を受けていることから、独自の地域特徴と供給資源があり、今まで観光における安らぎや楽しさ、被災地における防災と復興の礎、ジオツーリズムの先にあるアカデミズム等の構築が行われており、多種多様な価値を創生してきたが、新たに楽しく元気な高齢者像を実現してゆく為の資源を持った地域要素があると考え、糸魚川地域の農林水産・山川海・文化歴史の3つの要素から研究を行った。

内山 伸一・『糸魚川地域に於ける地すべり地帯と古来からの地名に関する関連性に就いての研究』・要旨

本研究は上記論題に対して「地名を学ぶ」こととして研究を進める。「地」は、万物が住むところ國・領土・居場所として「地力」「地方」「地形」、について以下の検索からはじめた。著者は大地の公園として世界ジオパークに認定された新潟県糸魚川に住んで日々何気なく暮らしてきたが、地名について深く考える事が無かった。災害など、遠いから関係ないで過ごしてきた。子供の頃、東京の叔母の所へ昼に伺う、突然家がゆれ驚いた、何かと聞くと地震よと答える、初めての脅威を味わう。新潟地震・中越地震・能登沖地震を体験した今日、もしかして現実に遭遇したらどうするか、歩きながら災害を想定して避難場所の経路を選ぶことに専念をするこのころである。吉川英治の「宮本武蔵」によると、鎖鎌の達人と知らずに、一夜の宿を乞う。母乳の匂いと、風車の音を聴き危険を察知した。また、百人一首(清原元輔)「契りきな互みに袖をしぼりつつ末の松山浪越さじとは」地名に刻む災害の記録を確認したい。本研究が少しでも、今後の防災に関するジオパークとして、地名を学び役立てる事になれば幸と願っている。

恩田 恵美子・『糸魚川ジオパークの水資源に於ける多様性と可能性に関する基礎研究』・要旨

筆者は新潟県糸魚川市に位置する焼山火砕流堆積地の中川原台地の上で育った。火砕流は水はけが良いので湧水はなく、日常の生活用水は田圃の用水と同じ水を家へ引いて、沸騰させたものを使用していた。雨が降ると泥水になって濁り、時には雨蛙が流れてくることもあった。小学校高学年の頃、集落で川の対岸の棚田の湧水を利用した簡易水道が完成して、やっと生水が飲めるようになった事から、安全な水についてはこだわってゆきたいと考え、研究を行った。

斉藤 一美・『世界ジオパーク糸魚川・24 のジオサイト×24 の楽しみ方×24 のストーリーの考査研究』・要旨

世界ジオパークに認定された糸魚川市に、著者は 2011 年に初めて仕事の依頼で訪れた。やがてその不思議な街の魅力に取り付かれ、いつしか一人の旅人になっている自分に気付いた。この街のツーリズムはその先に大地の自然を学ぶアカデミズムや、保全と活用に携われる社会工学的なステータスも感じる。いつしか愛する街に僅かでも自身が何か貢献したいと願うようになり、24 のジオサイトに対して楽しみ方とストーリーのあるテーマパークの研究を始めた。

竹内 慎治・『ジオトープ』・要旨

新潟県の西端に位置する当青海地域は、糸魚川世界ジオパークの中にあり、自然の価値が世界的に高く評価されている地域である。特に、翡翠や石灰岩の産地として有名である。また、田海ヶ池に代表されるように、日本有数の多種多様なトンボが生息する地域でもある。本研究の目的はこのような価値の高い自然の保護と子どもたちへ環境教育にある。本研究では、地域の地質や生態系に配慮しながらジオトープ（地形・地質を中心に考えた空間）を造成し、田海ヶ池に生息する貴重なトンボの補助的な繁殖地としての機能をもたせるなど、地域の自然を再生する取組を行う。そして、ジオトープ造成後の生態系の変容を継続的に観察することにより、ジオトープがトンボの補助的な繁殖地としての機能を果たしているかどうかなどを検証していく。また、このジオトープづくりを通じて、子どもたちの地域の自然への理解を深め、自然保護への意識を高めることにより、将来のジオパーク活動推進を担う人材育成につなげていく。

堀田 須美江・『誰でも行ける癒しのジオサイトに関する考察と研究』・要旨

新潟県糸魚川市はフォッサマグナの大地と、日本海気候独自の風土から、生態系の特異性と多様性、更にはその地域に育まれた文化の独自性など、大地の歴史的遺産として 2009 年世界ジオパークとなった。この大地の公園については地形や地質の異なった 24 のジオサイトが構築され、人々を楽しませてくれる。こうした背景の中で「公園」としての「familiarity」と「healing」の大切さ、即ち「誰でも行ける癒しのジオサイト」について世界ジオパーク認定都市として考えたいと願った。又同時に、文化交流都市として、この課題に対して著者自身も出来る事から取り組みたいとも考えた。この結果、著者自身が体験してきた山歩きや福祉の仕事に携わって来た経験地を基に、誰でも行ける癒しのジオサイトについて計画案を作り、物理・心理・史実の側面から考査を行うことで、ジオサイトの保護と利用・持続可能な環境計画・環境教育の一角を形成できればと願い、ジオツーリズムのコースについてプロトモデルを考案する研究を試みた。

山本 愛一・「マイコミ平の千里洞における植生の観察と今後の展望に関する研究」・要旨

著者の暮す横地地域は新潟県糸魚川市にあり、平成 21 年 8 月 22 日に日本で初めて世界ジオパーク（糸魚川ジオパーク）に認定された自然豊かな環境の中にある。特にここ横地はジオサイトの一つであり、「マイコミ平」のすぐ麓にある全戸 140 戸の集落として形成されている。このマイコミ平とは、全山石灰石でできている黒姫山の裾野にある標高 700m の盆地のことを指す。この場所も石灰石で形成されており、山口県の秋芳洞と同じく鍾乳石等がある地域である。マイコミ平の特徴は日本で 1 位から 4 位までの深さを独占する壑型洞窟が存在することにある。さらに、この壑型洞窟の一つに「千里洞」があり、この洞窟より吹き上げる冷風による影響が、周辺の植物の生態を低いところほど高山性の植物（標高 2,500m 級）を分布させるという不思議な箇所として、大変希少な地形価値が見られる。

昭和 51 年にこの壑型洞窟の調査にケイビング隊が入洞したが、想定していた以上の大雨のため壑穴の中で身動きが取れなくなったことがある。この遭難事故によりマイコミ平への入場が許可制になったことから地元の人たちも入場できなくなり、この素晴らしい自然があるマイコミ平が簡単に見られない状況となってしまった。地元で暮らしている著者たちにとって、もっと気楽にマイコミ平に入場し、地元こんな素晴らしい自然があることを認識していただき、また沢山の方々にマイコミ平を知っていただくことで、地域の活性化に寄与できればと思い論文のテーマとして取り上げた。

山本かずみ・『里山を活用した糸魚川ジオパークにおける生きがいネットワークに就いての事例研究』・要旨

近年、高齢化が進み、いたるところに空き家や売りが目立つ。田畑は荒れ、山林は手つかずで放置され、若者は都市へと移り住み、ふる里へ戻りたいと思っても働く場がない、と親の側からも子の側からも多数の声が聞こえる。人々は先行きの無い漠然とした不安の中で現状に喘ぎながら生きている。著者の住む高畑地区においても高齢化や核家族化が進み、年齢別の人口比率は、0歳～18歳までの就学世代は15%、19歳～55歳までの就労世代は23%、56歳～70歳までの熟年世代は33%、71歳～のシニア世代は29%と増々高齢化に拍車がかかっている。その中で老いも若きも元気に生き生きと生活し、豊かで充実した人生を創造することができれば、自ずと地域全体の生活化が図れ、その先には医療や介護、イジメや鬱など世の中に蔓延している諸問題も自然と解決の方向へと向かっていくのではないかと考える。世界ジオパークに再認定された糸魚川地域に住む著者として、この恵まれた自然に感謝し恩恵を享受しつつ真に豊かな未来へとつなぐ一つの糧として、この考察を重ねた。

